次世代に伝えたい
函館とくじらの縁

函館とくじらと聞いて、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。
例えば、お正月の「くじら汁」や給食で食べた「竜田揚げ」を思い浮かべる方がいるかもしれません。
こうして食べ物だけを見ても、函館とくじらの関係は浅くないことがわかるかと思います。
そこで、今年のお正月をきっかけに、少しだけ函館とくじらの関係を振り返ってみましょう。

函館とくじらの関係

函館とくじらの関係は古く、縄文時代の遺跡などからもくじらの骨が発見されたことから、縄文人もくじらを食べていたといわれています。1854年には、米国捕鯨船の休憩基地として開港要求を受け、日米和親条約の締結により開港。米国捕鯨船の燃料となる薪や食料を補給するようになります。さらに開港から3年後には「箱館丸」に最新の捕鯨銃を積み込んで択捉島（えとろふとう）付近の調査捕鯨が行われるなど、開港当初からくじらと縁が深いことがわかります。その後、1999年から日本小型捕鯨協会による「ツチクジラ」を対象とした小型捕鯨の基地となりました。

※現在、捕鯨は稼働していないそうです。

くじら汁の歴史

道南地域でお正月に“くじら汁”が食べられるようになったのは、江差・松前方面から始まったといわれ、江戸後期から明治にかけてニシン漁が盛んに行われていた時代、くじらは「ニシンを岸に追い込んでくれる縁起の良い動物」として崇められていました。このことから、初春から始まるニシン漁の豊漁を祈願して、お正月に「くじら汁」が食べられるようになったといわれています。また、くじらやシャチを漁業の神の名から「恵比寿」と呼ぶ地域もある他、「大きなくじら＝大物になるように」と縁起を担いで年越しや正月にくじら汁を食べる地域もあるそうです。

▲「くじら汁」
東北や北陸でもくじら汁を食べるところはありますが、お正月料理として食べるのは道南だけとのことです。

鯨族供養塔と供養祭

戦後、漁業の花形だった捕鯨。函館からも多くの人が捕鯨船に乗っていました。その捕鯨船の船長兼捕鯨銃の砲手を務めた「天野太輔氏」によって建てられた供養塔が、函館市弥生町の千歳坂沿いにあります。

碑文によると、1907年から26年間にわたり2千数百頭のくじらを捕獲。その後、3人の子・愛妻に先立たれ、尊いくじらの生命を奪った罪を思い起こして自宅の庭に供養塔を建てたとされています。

▲「鯨族供養塔（げいぞくくようとう）」
現在では絶滅危惧種とされるセミクジラの模型をあしらった高さ4mの供養塔。

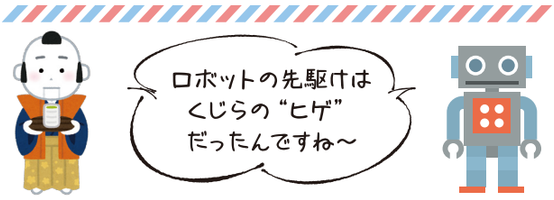
セミクジラ…日本哺乳類学会では絶滅危惧種に登録されている大型のくじら。体調は約13～18m、最大2mを越す“クジラヒゲ”が生えています。また、背びれがなく、浮上した時には小山のような美しい曲線の背中が浮かび上がることから「背美-セミ」、背中を海面上に出して長時間遊泳し続け「背中に乾きがある＝背乾-セビ」ということから、「セミクジラ（和名）」と呼ばれるようになったそうです

そうだったの！？ イルカとくじらの違い

水族館でも人気者の“イルカ”と雄大な“くじら”、どちらも海に生息する“哺乳類”ですが、実は「生物学的な違いはない」とされているんですよ。

どのように「イルカ」「くじら」に分けられているの？

なんとなく大きさで決められていて、少し小さめのものを「イルカ」と呼んでいるそう。おおまかな基準としては体調4mより小さなものが「イルカ」とされています。実際には4m以上もあり、くじらよりも大きなイルカもいますが…。

ロボットの先駆け！？

くじらには大きく分けて、“ヒゲ”がある「ヒゲクジラ」と、歯がある「ハクジラ」の2種に分けられていますが、この「ヒゲクジラ」の“ヒゲ”がバイオリンの弦など様々なものに活用されてきました。日本では、お茶を運んできたりするあの「からくり人形」のバネに使用。